



# 夢への挑戦!



自信と誇りと感謝を胸に!

小野中学校だより

第 23 号

文責：校長 大河原久宗  
2019. 11. 25. MON

TEL:72-3355 FAX:72-2829

## <教育目標>

- 【夢～自立・友愛・健康】
- ・課題を持ち、進んで学ぶ生徒
- ・互いのよさを認め、高めあう生徒
- ・健康で、心身を鍛える生徒



## 「いのちをいただく」を読んで!

お忙しい中、絵本「いのちをいただく」を読んでいただきありがとうございます。保護者の皆様からいただいた感想を紹介したいと思います。

原案：坂本 義喜 作：内田 美智子 絵：魚戸おさむとゆかいななかまたち

作者の内田さんが、2007年の秋、熊本県のある小学校に依頼された講演に出向いた際、「いのち」についてお話しされたのが坂本さんです。講演の前の授業参観で1・2年生の児童と保護者が食肉センターに勤めている坂本さんの話を聞いていました。内田さんは、だんだんと坂本さんの話に引き込まれ、ついには、ポロポロと涙があふれたそうです。その夜、坂本さんの話がどうしても忘れることができず、たくさんの人に知ってもらいたいとの思いから、「いのちを いただく」が生まれました。



坂本さんは、お話の中で、こんなエピソードも紹介してくれました。坂本さんには息子さんの他に娘さんもいます。娘さんは現在、介護士として働いています。

ある日、居酒屋で一緒に食事をしていると娘さんが「お父さんの仕事と私の仕事は似とるね」と言ったそうです。坂本さんは「何が似とるもんか。俺の仕事は牛や馬の命をとる仕事ぞ。おまえの仕事はお年寄りの世話をする大切な仕事やろ。お年寄り喜んでくれる。でも俺の仕事は喜ばれたりせん」と答えました。娘さんは、まっすぐに坂本さんを見て言いました。「あんね、おとうさん。私は、最期に会った人間が私でよかったなあって、お年寄りに思ってもらえるよう、毎日お世話している。お父さんも、牛や馬や豚に最期まで気持ちよく生きてほしいと思っとるけん。なでたり話しかけたりするんやろ。最期に会った人間がお父さんでよかったなあって、思ってもらえるようにしとるやろ? だけん、同じなんよ」

### 【保護者の皆様の感想】

- この絵本を読んでもらい、私も子どもの頃、牛を育てていて、ミルクをあげたり、大きくなると売られていく時に、牛が泣いていた姿を思い出し、女の子と一緒に育った牛が解かれる事、解く仕事をしている人たち辛いでしょうね。でも、生きている物を解かなければ、食べることが出来ず、肉も野菜も食べられるために生まれてきたのだから、なるべく捨てることはせず、今だけでなく、命を解く仕事をして働く人、動物、魚、野菜達に感謝して生きたいと思いました。<2年：母>
- どんな仕事にも大変なこと、辛いこと、理解してもらうには、なかなか難しいこともあるでしょう。本人も仕事に対して、それぞれに誇り、愛情、誠意を持って行っているからこそ、相手の気持ちを考え、迷い、悲しむこともあるのだと思います。人間に限らず、生き物は、生きていくために食べなければなりません。牛のみいちゃんも（涙によって）、それをきちんと知っていたのだと感じました。たくさんの命あるもの、生きているもの全て、そして、それを作り出す物、人々に感謝の気持ちを忘れてはならないと思いました。<3年：母>
- 「いただきます。」とあいさつするのは、「作ってくださった人への感謝の気持ち」、そして、「野菜や動物の命をいただく感謝の気持ち」を表すことだよ。と、ずっと教えてきましたが、この本を読むと、そんな軽い言葉ですますことのできない、心にズンッと響くものがあります。食べられるために生まれてきた牛の命でも、みいちゃんは、女の子と過ごせて幸せだった。女の子の心の痛みはどれほどだったのでしょうか。しかし、牛を売らないと暮らしていけない。牛を殺す仕事をしないと暮らせない。私たちはもっとそういう仕事もあって、その方々たちのおかげで生かされていることを知らないといけなかったと思います。「いただきます。」には、さらに大きな意味とさらに深い感謝を込めてあいさつしたいですね。牛の涙を無駄にしない生き方をしないとはいけません。<3年：母>

